普段着のわたしたち

10 月と言えば名古屋まつりです。とは言え、土日は忙しく祭りを見に行くこともままなりません。いつもお寺の近くを通る帰り道の山車を眺めています。

征阿

10 月下旬、コインパーキングのポールに吸い寄せられるようにぶつけて助手席ドアを修理。無事戻ってきたかと思ったら 11 月中旬の朝、突如エンジントラブル。弱り目に祟り目・・・。

自走できない壊れっぷりだったので、自宅へレッカーを呼び、修理工場へ。やり場のない怒りともどかしさでイライラしましたが、運ばれていくその後ろ姿は、「ママ、ごめんね。ボクちゃんと治して帰ってくるから」と言っているようで（涙）。

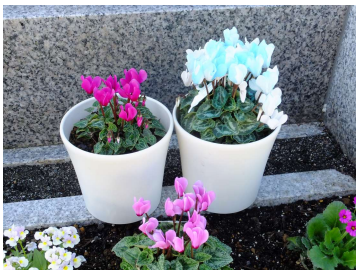
かれこれ８年乗っている愛車。「大丈夫！ママちゃんと治療費払うからしっかり治してもらいなさい」と送り出し。な～んてドラマティックに勝手なことを言っていますが、全て私の責任。それにしても、前日まで乗っていたので、道の真ん中で停まらなくてよかった。有り難うございます。

訶梨帝母

何週間か前のラジオ番組でグッチ雄三さんが、「ピザの具に奈良漬を細かく刻んだ物をのせるととても美味しい」と言っていました。確かにとろけたチーズにあいそう。それでピザトーストを作りました。

俊徳丸

秋冬ものの花を探しに花屋さんへ立ち寄ると、水色のシクラメンを見つけました。取り合えず鉢植えにし、どこに合うかと置く場所をいろいろ変えて最後に持って行ったのが墓地。



昭和 50 年に布施明が歌ってヒットした『シクラメンのかほり』の真綿色よりもっと清しい色です。

「出逢いの時の　君のようです」って、女優さんで言うと誰かな？　八千草薫さん。昭和 29 年『宮本武蔵』でお通役をされた時が最初の出逢い。

修し奉る、一会信心の施主は現住より、志す精霊は令和元年 10 月 24 日に享年 89 歳をもって往生せし、俗名谷口瞳の霊位、追善増長菩提。南無阿弥陀佛　　迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/　「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

なんてったってアイドル

佛の世界で人気がある佛さまというと「地蔵菩薩さま」と「観音菩薩さま」になるでしょう。被災地を慰問するアイドルスターと言ったところでしょうか。今回の台風 15 号の際も初入閣した小泉進次郎氏ばかり追っかけていたマスコミよりも多くの芸能人が先に千葉県の被災地を訪れていたそうです。では何故このお二方が大人気かと申しますと地獄図を見るとわ

かります。炎などなにともせず煮えたぎる釜の中から苦しむ亡者を助け出しているのは地蔵さまです。よく見ますと蓮の草履を履いておられます。これで炎の中も歩いていくことができます。また血の池地獄の前では沈みそうになっている女性亡者に「血品経(けつぼんきょう)」を渡しているのは如意輪(にょいりん)観音さまです。すると不思議、池の中から蓮の葉が出てきて亡者を救いあげます。観音さまの中でもたいへん美しいお姿で女性にファンが多いです。

このように御自ら地獄まで出向いてお救いくださるのは多くの佛様の中でもこのお二方だけです。また幼くして亡くなった子供たちが集められる「賽の河原」にも地蔵さまがおいでくださいます。夕方になると恐ろしい鬼が現れて黒金の棒で積んだ石を押し崩してしまいます。すると子供たちのまえに地蔵さまが立ちはだかり、「娑婆と冥途は遥かに遠いから我を冥途の父母と思いなさい」と声をかけながら自らの衣の裾に子供たちをかき入れ守ってくださいます。子供たちはやさしい地蔵さまの錫杖や衣の裾を強く握りしめて離しません。

左の写真は京都市の繁華街の寺町通にある「矢田寺(やたでら)」さんの絵馬です。私がお勧めする地蔵さまのパワースポットです。矢田寺さんの本堂の御本像は地蔵さまです。たいへん珍しいです。更に絵馬のように足元が炎で包まれたお姿です。平安時代、矢田寺住職の満米和尚は頼まれて閻魔大王に戒を授けに地獄へ行きました。その時、炎の中で必死に亡者を助け出している一人の僧を見ました。満米和尚はいたく感銘し、帰寺後その光景を佛像にして御本尊として祀りました。これが日本初の地蔵さまと伝えられています。

下の写真は、毎年私のお寺でおこなわれています「地蔵さま顔拭き祭り」です。お面姿の中身は私です。1 時間ほど地蔵さまにならせていただき町内をお練りして本堂で御祈祷をします。年々体力的にきついです。コラ！アイドルは泣き言いったらいけません。なんてたってアイドル♪アイドルはやめられない♪

俊徳丸

西太后は、お好きですか。中国三大悪女（武則天、呂后）として有名です。彼女の生きた時代は日本が幕末～明治。中国最後の清王朝を48年支えた傑物。私は浅田次郎著『蒼穹の昴』を読んでからこの女帝のファンです。英にアヘンを持ち込まれ、米仏日に侵略され、ガタガタに揺らいだ清国を、植民地にはされまいと踏ん張り続けた西太后。当時中国の女性の平均寿命が40代のところ、74歳まで戦い続けたスーパーウーマンです。このお姿は69歳だとか。お肌のハリ、黒々とした髪、眼光の鋭さ、女官がついていけないほどの早歩き。身長は164センチ。そこに15センチの高靴。強く、威圧的であらんとあえて心掛けた彼女の心意気が伝わってくるようです。

大清帝国は1616年、満州族愛新覚羅氏が建国した征服王朝。六代乾隆帝を最盛期として徐々に衰退。西太后は、ぐうたら亭主（九代咸豊帝）と放蕩息子（十代同治帝）に代わり政務の実権を握ります。41歳の時、息子の同治帝が19歳で亡くなると、甥（十一代光緒帝）を4歳で即位させ、簾の後ろで皇帝を導くという垂簾聴政を行い、ラストエンペラーとなる十二代宣統帝溥儀まで継ぎました。女性はどんな高官の子女であろうと読み書きができないご時世。西太后は中流役人の娘だったにも関わらず、読み書き絵画までも会得し、教養高い知的な女性だったゆえに成せた業。

こもりうた59

過日、NHK『偉人たちの健康診断』で西太后の回がありました。紫禁城に残る「西太后のカルテ」には三百近い中医薬（漢方）の処方箋が残っているそう。若い頃から不安、不眠、調経に効く処方を受けていたという事がそこから読み取れるそうです。中でも46歳で初めて処方された「延齢益寿丹」。数十種の生薬で構成されており、中には現在手に入らないモノも含まれているそうで今や幻の薬。北里大研究チームの調査によると、その効能は倦怠感、不眠、精神不安、更年期障害。同年代女性としてはさぞやとお察し申します。中でも、「遠志（おんじ）」と「石菖蒲（せきしょうぶ）」なる生薬。これは脳の機能改善、活性化、記憶力判断力の維持に効果があるそうで、まさに「西太后のアンチエイジングの秘密」。私が弱ってボケたらこの国は列強に侵略されてしまう！という彼女のリクエストによるものかも知れません。とても興味深い！是非飲んでみたいものです。

西太后がなぜ悪女と呼ばれるか。それはたった一冊の本によると研究者は言います。北京在住の英人、バックハウスが著した『西太后治下の中国』。英政府の秘密工作員だったバックハウスは、西太后は残虐で奢侈贅沢の暴君などと悪口雑言。こんなひどい独裁者の下で苦しんでいる中国民衆を救う為に、英は出兵するんだという、清国侵攻へのプロパガンダとして書かれたのだろうと。しかしそれが内外でベストセラーになり、西太后は稀代の悪女へ転落。悪い噂の方が面白がられ、信じられ、拡散するのは人間のサガでしょうか。

訶梨帝母

『私説法然伝』（５９）

六道を見た③

先月号では東国における頼朝の軍事政権についてと義経らが義仲を討ち滅ぼすことまでについて書きました。今月号はその続きについて書きます。

【西国にて体制を立て直した平家一門は、再び中央の奪還を目指して福原まで勢力を盛り返していた。寿永三年（一一八四年）後白河帝は平家追討と三種の神器の奪還を頼朝に命じた。そして義経・頼範に軍勢を率いさせて平家との合戦に及ぶ。「一の谷の合戦」と呼ばれる平家が京の都奪還の本拠地としていた福原への侵攻戦である。本隊は頼範が率いており西国街道から福原の東側の生田口（いくたぐち）へ侵攻し平知盛・平重衡ら平家軍本隊と相対する。義経らは別働隊として丹波街道を侵攻し、三草山で平資盛（たいらのすけもり）らの軍勢を夜襲で破り、その後軍勢をさらに分けて福原を目指して侵攻する。義経らは一の谷方面・塩屋口、義経軍の別働隊は山の手方面・夢野口へ侵攻した。二月七日各方面で源氏と平家の軍勢が激突する。この時に義経軍に加わっていたのが熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）である。直実は先駆けとして平家軍へ攻撃を仕掛けている。義経らが各方面での戦いに勝利し、本隊の頼範も総攻撃を仕掛けて平家軍は劣勢となり敗走する。平家の総大将であった宗盛は敗北を悟り安徳天皇と三種の神器と共に四国・屋島（やしま）へと逃れた。この戦いで平家側の主だった将が多く討ち取られ、戦上手の平重衡は捕虜となってしまう。屋島に逃れた宗盛は、この島を本拠地として要塞化し、弟の知盛は下関の彦島を要塞化し、源氏と戦い続ける事になる。義経軍の先駆けであった直実は平敦盛（たいらのあつもり）を討ち取ったと『平家物語』にある。この戦いの後、所領の裁判などで心労が重なった直実は出家し、法然上人と出会う。捕虜となった重衡は三種の神器との交換で開放すると、後白河帝の交渉材料にされるが、宗盛は後白河帝に完全に不信感を抱いており、交渉は決裂した。この戦いにより平家は事実上福原から京の都へ再び舞い戻る事は不可能となったが、今だ三種の神器並びに安徳天皇を擁しており、源氏は戦いに勝利したものの、その戦いの目標を達成することはできなかったのである。後白河帝は三種の神器を持たない状況で後鳥羽天皇を即位させる。これにより後白河帝と平家は完全に決裂したのである。

知盛は彦島を拠点に九州の兵を集め徹底抗戦を半年間続ける。しかし宗盛が守る屋島が義経の奇襲によりあっさりと陥落してしまう。ついに平家は彦島に追い詰められてしまったのである。】

以下次号に続く（征阿）

源義経像

人間の中身

首相の「桜を見る会」で野党が大騒ぎしています。桜は春のものですが、どうして今頃？　モリカケ問題で国会審議を散々サボりましたね。また空振りでは・・・。

招待されたタレントの中には「なぜ私が選ばれたかわかんない」と言って、周りから「行くなよ」と突っ込まれた人。「知らんオッサンと（桜を）見たないわ」と今年も招待を断った千原ジュニアなどなど。

庶民の花見を描いた江戸落語の『長屋の花見』、さわりだけご紹介しますと、

大家さんから長屋一同揃って出て来いと言われ、溜めている店賃の催促かと思ったら、酒瓶が三本に卵焼きと蒲鉾が入っているというお重を出された。「桜を見に行こう」と誘われて出掛けることに。

一方、上方落語の『貧乏花見』では、雨模様で出仕事に行きそびれた裏長屋の連中たちが、花見に出かける人々を見て、自分たちも花見をしようと相談するのが発端。ここに東西の気質の違いが表れています。

お酒の代わりに「お茶け」を用意しますが、「酒もないのに行けるかいな」と反対する男がいる。そこで兄貴分が言う台詞が、「心まで貧乏すなよ。あっちが酒盛りやったら、こっちは茶か盛りや。人間、気の持ちようやないか。気で気を養え」。これが噺の作者が言いたかったことでしょう。

持ち寄った肴はというと、「長いなり」とはオカラ、「カマボコ」と聞き違えたのは飯の焦げ、「玉子の巻焼」は沢庵といった、ホテルニューオータニには無さそうなメニュー。

緋毛氈（ひもうせん）の代わりに梅干しを並べる筵（むしろ）を広げ、幔幕を張ろうと女房連中の腰巻を吊るす。こうして花見の宴が始まるのです。

ここで申し上げたいことは、分相応の「桜を見る会」を選んで出席すれば良いというのではありません。

臨済宗の開祖、臨済義玄（りんざいぎげん）の言葉として良く知られているのが、

「随処（ずいしょ）に主（しゅ）と作（な）れば、立処皆真（りっしょかいしん）なり」

いつ、いかなる場所でも、そこでしっかり主体性を持っていれば、どこにいようとそこが真実の場所（素晴らしい所）だ、という意味です。

首相からの招待なら普通は行くでしょうが、説明がつかなくなった政府は来年の「桜を見る会」は中止と発表しました。

立場上、本音を明かせない人がいます。黙って従わないと辞めるしかない業務命令が下りてくる場合もあります。そんな時でも自分を見失うことなく、周囲の環境や時間が変化しても自分らしく生きていけば、状況が必ず良くなるという教えなのです。

中国唐代の禅僧の教えを日々実行するのは簡単なことではありません。けれども、人間の中身に関する目標は高く掲げておく必要があるのです。

迷走坊

続・観経物語（6）

観経要讃

五、佛陀は慈言垂れたまひ
　汝は知るや阿彌陀佛
こゝを去ること遠からず
　心眼ひらく人や見む。

前回までに、韋提希夫人は佛陀(釈尊)に対して「わがために、ひろく憂脳なき処を説きたまえ。われ、まさに往生すべし」と請い、さらに「われをして清浄業処を観ぜしめたまへ」と重ねて請いました。このことから憂いがなくて清き処とは「浄土」であることが推測できました。このとき、佛陀(釈尊)は、眉間から光を放ち十方を照らし、その光は還って台となり、その中には十方諸佛の浄妙な国土が現れました。それは佛陀(釈尊)が韋提希のために「佛力」を用いて現したのです。韋提希は諸佛の色々な浄土のなかから「この諸佛の土、また清浄にしてみな光明ありといえども、われ、いま極楽世界、阿弥陀佛の所に生まれんことを楽う」と言って、唯、極楽浄土を選んで、さらに「願わくは、世尊よ、われに『思惟＝浄土の佛菩薩などや、国土の有り様を思い浮かべ、想念を寄せ、心に映す方法』と『正受＝心が集中、統一して極楽浄土の有り様や、佛、菩薩などとの、観察と対象が統合される方法』を教えたまえ」と、請い願ったのです。この韋提希の「請」に対した佛(釈尊)のお答が「汝よいま、知るや否や、阿弥陀佛、ここを去ること遠からざるを。汝よ、まさに心を繋けて、かの国の浄業を成ぜし者を諦観すべし」と言うものでした。今回の関本諦承師の要讃(五)はこのところを説いておられるのです。関本師は、韋提希が十方の浄土の中から極楽浄土を選び、その国に往生することを願った場面には触れておられません。また、韋提希が選んだ浄土が、阿弥陀佛の極楽浄土と名づけられていることをなぜ知っていたのかとか、また韋提希のような心の乱れた人がなぜ極楽浄土のような、清浄で人の心想を超えるような佛の世界を観ることができたのかという疑問にも触れずのままです。韋提希が極楽浄土や阿弥陀佛の名を知っていたことは佛陀(釈尊)の弟子の説法を既に聞いているから推定できることですし、韋提希が請した思惟、正受などの観法は、往生したいとする韋提希の修行には相応しくない方法で、本当は佛陀(釈尊)のお答えを導き出すための便法であるから省略して差し支えないと考えられいきなり「心眼ひらく人や見む」と言って、本当は修行でなく佛の力で心の眼を開いた人が観ることができると、韋提希に自分の努力や修行に心を傾けてはいけないと釘を指しておられると、師は読み解き、私たちに示されておられるのです。

《妙星斎》